朝日新聞社に無断で転載することを禁じます【承諾番号24-1865】

マーラー「復活」あうんのタクト

尾高忠明 大阪フィル音楽監督7年目

練習に笑い 演奏に伸び ■ 大きな音ときれいな音 両立

指揮者の尾高忠明が大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督に就任して、7年目を迎えた。関西では初めて経験する常任ポスト。いまでは楽団から「あうんの呼吸」と言われるほどの、深い関係性を築いた。この夏、ともに大曲に挑む。

1947年、神奈川県生まれ。71年にNHK交響楽団を指揮してデビューし、これまで国内外のオーケストラの常任指揮者などを歴任してきた。

大阪フィルの音楽監督も、3年の任期を終えたら辞めるつもりだった。尾高は、自分はいったんその立場に就くと、就任期間が長期化しがちだと、ちゃめっけたっぷりに語る。「あまり大きなけんかをしないからかな」

楽団員と温和な関係性を築いていたのは、指揮者だった父・尚忠も同じだった。「オーケストラとの演奏旅行でも、みんなと相撲や囲碁をして遊んでいたみたい。そんな男の息子なので、僕も楽員さんと一緒にいるのは、すごく好き」

大阪は「笑いのまち」だが、楽団員から「毎日ウケている」そうだ。

練習中、楽団員が険しい表情になったときは、ちょっとしたジョークを飛ばしてみる。笑いが起き、場が和む。すると、演奏に「伸びが出てくる」という。若手のころ、ドイツの名指揮者カイルベルトからもらった、「楽団員の顔がほぐれていなければ、いくら練習しても意味がない」という助言を心に留めている。

47年に朝比奈隆を中心に設立された大阪フィル（当時は関西交響楽団）は、朝比奈時代に築いた、ダイナミックで迫力ある音色が特徴だ。当時、尾高は朝比奈のもとで楽団が練習する風景を見て、「かっこいいなと思った」という。

尾高が2018年に音楽監督に就任してから、大阪フィルはベートーベンやブラームス、メンデルスゾーンの特別演奏会に取り組んできた。伝統の「大きな音」を磨きながら、「きれいな音」との両立も目指し、音色をアップデートさせている。

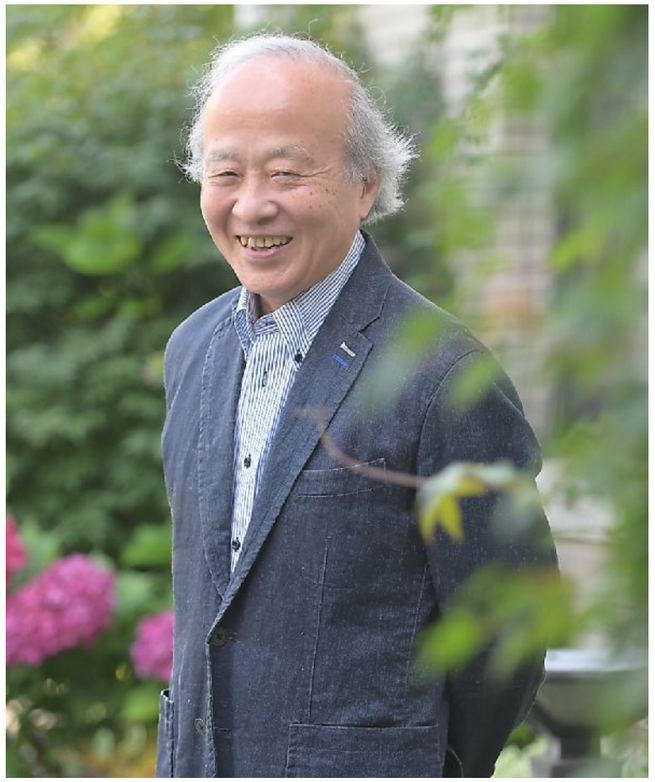
今回、尾高と大阪フィルが挑むのは、マーラーの交響曲第2番「復活」だ。大阪国際フェスティバル（朝日新聞社など主催）の夏公演として披露する。

大規模の編成に、独唱あり、合唱あり。死からの復活を歌う、壮大な楽曲。「朝比奈先生との演奏も立派だったと聞く。今は、またちょっと違う味が出てきてくれるかな」と期待する。

桐朋学園大で師事した斎藤秀雄から、「指揮者は50歳で一人前」と言われた。それなら、80歳ではようやく「三十路（みそじ）」といえる。「年を重ねて出てくるよさは、必ずある。棒が振れるうちは振らなきゃいけないと、僕は思います」

昨年、外山雄三と飯守泰次郎が亡くなり、身近な存在だった先輩指揮者を相次いで見送った。そんななか、「残されたこれからの人生を、いいものにしなければいけない」という意識が強くなってきたという。「今回の『復活』が、そのためのファーストステップになればうれしい」

（田部愛）



大阪市西成区、滝沢美穂子撮影

◇8月2日午後7時、大阪・フェスティバルホール。
☎06・6231・2221（同ホールチケットセンター）